国文法を利用した英文法教育の試み（２）：*please* の使い方

小　林　亜希子

０．はじめに

先の拙稿（小林（2008））で，日本人が英語に習熟するには日英語両方の文法を学ぶことが必要不可欠であると主張した。両言語の文法システムは大きく異なる。日本語を頭に思い浮かべ，それぞれの単語を英訳して順序を変えればおしまい，ということは（テスト問題以外では）まずない。英文を作るにはまず，自分の使う日本語を正しく分析する文法力をつける必要がある。逆に言えば，母語の分析力が向上すれば，英語力の向上にもつながるということである。小林（2008）では，その例をいくつか示した。

本稿はその続きである。今回は *please* の使い方を取り上げる。単純に「*please* ＝ ～して下さい」と考えていては，意図せず失礼な物言いをしてしまいかねない。頼み事をする状況がさまざまあるように，頼み事をする相手への配慮を表す手だてもさまざまある。適切な物言いをするには，どのような状況にどのような表現を対応させればよいのかを知る必要がある。その対応ルールは，母語である日本語の知識を内省して学習者みずからが“発見”することが可能である。その母語知識の“発見”を利用して英語の丁寧な気持ちの表し方が学習できることを見ていきたい。

１．*please* は本当に「丁寧な表現」か

我々は中学高校の英語の授業で，*please* を「丁寧にモノを頼む時に付ける表現」と学ぶ。辞書を引いても，英和辞典では「どうぞ，どうか，すみませんが」「どうぞ［どうか］…してください」「お願いだから」「お願いします」などの訳が当てられ，「丁寧さを表して」（『ユース』），「丁寧な表現」（『ロングマン』），「穏やかな命令」「丁寧な依頼」（『E-Gate』）と説明されている（傍点引用者）。英英辞典の説明も同様で，“used as a *polite* way of asking for something or telling somebody to do something”（何かを求めたり，何かをするよう頼んだりするときの丁寧な表現）（OALD），“You say **please** when you are *politely* asking or inviting someone to do something”（何かをするよう丁寧に頼んだり誘ったり

するときに *please* を使う）（CEDAL）とある（斜体引用者）。

こういった説明に前後して次のような用例が示される。英語学習者は当然，こういった文を「丁寧にモノを頼む表現」であると考えるだろう。

（１）ａ．*Please* come here.［Come here, *please*.］（どうぞこちらへ）（『ユース』）
　　ｂ．*Please* pass me the salt.（塩を取ってください）　（『E-Gate』）
　　ｃ．*Please* sit down.　（OALD）

しかし，辞書には書かれていないことだが，*please* が付くとかえって失礼になってしまう場合もある。以下は，日本人の典型的な *please* の誤用として White（1993）が挙げた例である。

（２）ａ．［目の前にあるエレベーターで，用務先にまで行けるかと尋ねる同僚に］
　　Yes. *Please* get off on the ground floor.
　　（はい。１階で降りて下さい。）
　　ｂ．［講演会の司会が，講演者 X の紹介をした後で］
　　Professor X, *please* begin your talk.
　　（それでは X 教授，お願いいたします。）

和訳は筆者による補足である（以下の例文についても同様）。日本人[1]はこのような和文を頭に思い浮かべ，「～して下さい」とか「お願いします」に対応する表現として *please* を使うのだと思われる。しかし White によると，（2a）の話し手は相手の知性を疑っているかのような印象を与え（p.198），（2b）と言われた人は怒りかねない（p. 199）という。

鶴田他（1988: 34）によると，パーティの主催者が客を招き入れようとして次のように言うのは（少なくともイギリス英語では）適切でない。温かい歓迎の気持ちに欠けるというのである。

（３）*Please* come in.（どうぞお入り下さい。）

１本稿での「日本人」は，「英語を“外国”のことばとして生活する日本語母語話者」を指す。「学習者」は「英語を外国語として学習する日本人」を指す。ともに正確さを欠くが，簡潔さの便宜のためと諒解されたい。

また，Leech and Svartvik（2002: 175）は，次のような物言いは依頼として丁寧（polite）でないと断言している。

（4）a．*Please* hurry up!　（急いで下さい！）
　　b．This way, *please*.　（こちらへどうぞ。）

さらにHofmann and Kageyama（1986: 56）（以降H&K）によると，荷物を持って手がふさがっている人がドアを開けてもらおうと，次例のように*please*を使うと非常に侮辱的になることがある（“can be very insulting”）という。

（5）Could you open the door, *please*?（ドアを開けてもらえませんか？）

それでは，辞書の記述は間違いで，*please*は実は失礼な表現なのか，というと決してそうではない。Carter and McCarthy（2006）は，*please*はサービス業でのやりとりによく用いられ，客が店員に頼むときばかりでなく，店員が客に何か指示をするときにも使われると説明し，（6a, b）の例を挙げている（p. 713）。筆者が2008年度の『NHKラジオ英会話』（以降『NHK』）から収集した類例も（7）に追加しておく。*please*が失礼な表現ならば，客に向かって使うはずはないだろう。

（6）a．［客が店員に］Can I have the bill, *please*?
　　（お勘定をお願いできますか？）
　　b．［店員が客に］Okay and what's your initial Mrs Leach?
　　... And your date of birth *please*?
　　（それと，生年月日をお願いします。）
（7）a．［空港係員が乗客に］Could you open your bag, *please*?
　　（バッグを開けていただけますか？）
　　b．［客室乗務員が乗客に］*Please* fasten your seatbelt.
　　（シートベルトをお締め下さい。）　（7月号より）

また，（8）のように皿洗いを頼むとき，*please*は感謝の意を表す（H&K, p. 55）というし，（9）では*please*がお悔やみ・同情・思いやりの気持ちを表し

ている（Leech and Svartik（2002: 183））。（９）の類例（10）も追加しておく。

（８）*Please* wash the dishes.　（お皿を洗って下さい。）
（９）ａ．*Please* send my best wishes to Sally.
（サリーによろしく伝えて下さい。）
ｂ．*Please* accept my deepest sympathy on the death of your father.
（お父様が亡くなったことについて，心からお悔やみ申し上げます。）
（10）ａ．*Please* have a nice trip.（旅行を楽しんできて下さい。）（H&K, p. 55）
ｂ．［家族を亡くした人に］
If there is anything we can do to help, *please* let us know.
（力になれることがあれば，言って下さい。）（『NHK』（４月号）より）

相手に対する感謝・思いやりの気持ちを示すこの *please* は丁寧度がとくに高いと言えるだろう。

つまり，使用する状況によって，*please* は失礼（（２）-（５）），丁寧（（６），（７）），とくに丁寧（（８）-（10））いずれの意味合いも持つ。「*please* は丁寧さを表す」という認識しかなければ，*please* を適切に使うことはできない。「場合によっては失礼になる」と知っていても同様である。*please* がどういう「丁寧さ」を表し，その意図はどういう状況でならば正しく伝わるのか（語用論）を知って初めて我々は *please* を使えるようになるのである。

なお，日本語で「丁寧」というと，「礼儀正しい」，「腰が低い」，「愛想が良い」といった立ち居振る舞いや心がけを連想しやすい。しかし，本稿の議論で用いられる「丁寧」はそうではなく，相手に何かを頼むとき，相手の立場・都合への配慮が適切な形でことばに表されている（それゆえに相手がその物言いを聞いて不快感や違和感を持つことがない）ことを意味すると理解していただきたい。

２．「～して下さい」は本当に「丁寧な表現」か

２．１　丁寧な「～して下さい」と失礼な「～して下さい」

前節で見たとおり，*please* は使い方次第で丁寧にも失礼にもなる。そして多くの学習者は知らず知らず，そのような失礼を犯している。

興味深いことに，日本語教育においても「～して下さい」の使い方を教える

のに同様の問題があるという。関根（2007）によると，日本語学習者はかなり早い時期に「～して下さい」を「依頼」として学ぶ。また，辞書で助動詞「ください」を引いても，「相手に懇願する意を表す」（『広辞苑』），「その動作をする人に丁寧に頼む」（『日本語大辞典』）と説明されている。これでは，「～して下さい」を付ければ常に丁寧な物言いになると日本語学習者は考えてしまうだろう。

たしかに，例文（11）には何かしらの丁寧さがあると感じられる。

(11) a．［客が店員に］　今日のおすすめを教えて下さい。
　　b．［教員が学生に］　教科書９ページを開いて下さい。
　　c．［教員が学生に］　そこのペンを取って下さい。
　　d．［車で帰る同僚に］　ついでに駅まで乗せて行って下さい。
　　e．［溺れている人が］　助けて下さい！

しかし（12）では，教員は「丁寧な依頼」というよりも「ぶしつけな命令」を受けた気がするだろう。

(12)［日本語を学んでいる学生が，ある本に興味を持っているようなので・・・］
　　教員：　その本なら私の家にありますよ。
　　学生：　先生，明日，持ってきて下さい。
（関根（2007: 81）を改変。下線引用者）

つまり，「～して下さい」は使い方次第で丁寧にも失礼にもなる。そして我々母語話者は（11）は丁寧，（12）は失礼と“判断”できる。つまり，無意識のうちに「～して下さい」の語用論を身に付けているのである。

学習者が無意識に持っているこの母語知識を利用すれば，一見複雑怪奇に見える *please* の使い方を納得できるように学ぶことができる。そのためにはまず，その無意識に知っている「～して下さい」の使い方を内省することが必要である。以下，その学び方を提案したい。

２．２「～して下さい」か「～して」か

表記を簡潔にするため，いわゆる「丁寧な依頼」は「～して下さい」形のみ

提示する。しかし実際には，日本語の話し手は聞き手との関係が「ウチ」か「ソト」かを文末で必ず明示する。従って，「～して下さい」も実際には，ウチの相手には「～して（くれ・ちょうだい)」，ソトの相手には「～して下さい」と使い分けされる。

井出（2006）が指摘するとおり，「ウチ」「ソト」の区別は社会的にすでに決定されており，個人的判断の入る余地はほとんどない。例えば，個人的に仲が良くてもサークルの先輩には「ですます体」を使うし，親と距離を置きたい子どもでも親には「タメ口」をきくのが普通だろう。「～して下さい」と「～して（くれ・ちょうだい)」の使い分けは「依頼」とは別の問題であるため，本稿の議論の対象とはしない。以降の「～して下さい」は，正確には「～して下さい」か「～して（くれ・ちょうだい)」のいずれかを意味すると理解されたい。

３．考察する依頼表現と学習のステップ

３．１　間接度と丁寧度

同じことを頼むとしても，頼み方は一とおりでない。Brown and Levinson（1987）の理論を基に，Fukushima（2000）は依頼表現を「直接度」という点から３分類している。

(13)　a．直接的依頼：　Open the window.
　　b．間接的依頼：　Would you mind opening the window?
　　c．ほのめかし：　It's hot in here.　　（Fukushima（2000: 68））

「直接的依頼」とは，依頼の意図を明示する構文（命令文など）によって直接的に依頼することである。命令文に *please* が付いても依頼の意図が明示されていることに変わりはないので，これも直接的依頼である。「間接的依頼」とは，疑問文（*Will you ...?*）や願望文（*I would like you to ...*）に依頼内容を“埋め込”んで，依頼の意図をぼかすことである。依頼の意図はぼかされるが，依頼したい内容（“open the window”）は明示される。これに対して「ほのめかし」（off-record）は，依頼の意図も内容も明示せず，依頼の理由（“it's hot in here”）などを述べることである。相手が依頼を察するように仕向ける点で，もっとも間接的な依頼である。依頼をぼかすのは「相手に申し訳なくて直接頼

みにくい」という恐縮，へりくだりの気持ちの反映だと考えられるため，依頼の間接度は大体において丁寧度に比例する。

この分類を日本語の依頼表現のいくつかに当てはめてみよう。

(14) a．直接的依頼： 窓を開けろ。窓を開けてよ。窓を開けて下さい。
b．間接的依頼： 窓を開けてくれない？窓を開けてほしいな・・・
c．ほのめかし： 暑いねえ。その窓，開く？ここ，エアコンないのかな。

「～して下さい」は依頼の意図を直接に表す。しかし，「～しなさい」と比べれば，丁寧の助動詞が付加された分，丁寧度は高くなる。これら多様な依頼表現のうち，まず「～して下さい」形の依頼に注目を置き，この表現を用いた依頼が適切である場合とそうでない場合を我々はどのように判断しているのか，その無意識のルールを明らかにする。よって，以降の考察では，丁寧度を次の３段階に分けて考える。

(15)

	依頼の丁寧さ
a．～しなさい[2]	直接的依頼。「丁寧さ」を表す表現なし。
b．～して下さい	直接的依頼。「丁寧」の助動詞あり。
c．（より丁寧な表現）	間接的依頼およびほのめかし。 間接表現により丁寧さを表す。

３．２　学習のステップ

本稿の目的は，①「日本人が無意識に持っている母語知識」を利用して，②「英語 *please* の語用論」を学べることを示すことである。まずは①の内容を明らかにする。具体的には，次の疑問を解決する。

(16) A．「～しなさい」vs.「～して下さい」：「～して下さい」は，
「～なさい」に比べて何が“丁寧”なのか？

2「～しなさい」はソト向きの表現である。ウチの相手には「～しろ」を用いる。「～して下さい」と同様，この使い分けも本稿の議論の対象外である。以降の「～しなさい」は「～しなさい」か「～しろ」のいずれかを表すと理解されたい。

B．「～して下さい」vs. より丁寧な依頼：「～して下さい」が
十分な丁寧さを表す場合とそうでない場合は何が違うのか？

この疑問を解決した上で，②を明らかにする。具体的には，次の２つの疑問を解決する。

(17) A．命令文 vs. 命令文＋ *please* ： 命令文＋ *please* は，
命令文に比べて何が“丁寧”なのか？
B．命令文＋ *please* vs.より丁寧な依頼： 命令文＋ *please* が
十分な丁寧さを表す場合とそうでない場合は何が違うのか？

この目標をいかに達成するかであるが，学習者が自らのうちにあるルールを“発見”するように導いていくことが望ましいと考える。具体的には，次のステップで学習を進めていくことを提案したい。

(18) A．データ収集：「～しなさい」形の依頼が適切である状況，
「～して下さい」が適切な状況，より丁寧な表現でないと
不適切となる状況の具体例をいろいろ考える。
B．一般化：「～して下さい」を使うことが適切となる条件をまとめる。
C．考察： 我々がある依頼を「丁寧」「失礼」だと感じるとき，
なぜそのように感じるのかを考える。
D．英語との比較： 日本語をデータに得られた「丁寧さ」の理解を
使って英語の丁寧さの問題（17A, B）が解決できないか考える。
共通点・相違点をあぶり出していき，*please* の語用論を理解する。

以降，このステップに従って議論を進めていくことにしたい。

３．３　データの限定

本稿で主なデータとするのは「命令文＋ *please*」タイプの構文である。実際には *please* は様々な構文に現れるのだが，「丁寧度」をコントロールするためにこの限定を行う。また，文のどの位置に *please* が現れるか，どういうイントネーションで発話されるかによってもニュアンスが異なる場合があるが，議

論しない。これらについては先行研究を参照されたい（e.g. 有田（2007），Sato（2008），鶴田他（1988），White（1993），Wichmann（2004））。しかし，*please* の中核的意味，およびそれが依頼表現に付加する含みは，構文やイントネーションによらず同じであると考えている。詳細な議論は今後の研究に譲りたい。

4．「～して下さい」の語用論

4．1．「～しなさい」 vs. 「～して下さい」

初めに，（18A）の作業によってデータを収集していくと何が“発見”できるか考えてみよう。学習者はすぐに次のことに気づくのではないだろうか。

(19)「～しなさい」は「失礼さ」を出したいときに使う表現である。

「～しなさい」が用いられるのは，飼い主とペット，スポーツのコーチと選手，銀行強盗と銀行員のように，絶対的な上下（強弱）関係を前提にして依頼が行われる場合である。親が子どもに有無を言わさず何かをさせようとする場合もそうだろう。

(20) a．［飼い主がペットに］新聞を取ってこい。やめなさい！
　　b．［コーチが選手に］もっと下がれ。まじめにやれ。
　　c．［強盗が行員に］　金を出せ。車を用意しろ。
　　d．［親が子どもに］　勉強しなさい！あんな奴とは付き合うな。

話し手（以降 S ）が聞き手（以降 H ）に絶対にその行為をさせようとする場合，H が逆らえないように S は自らの立場の強さを誇示する。「～しなさい」はその表示である。それは H の立場の弱さの表示（「見下し」）であるとも言える。つまり，この表現は丁寧度が「低い」というよりも，「マイナス」＝「失礼」なのである。

注意せねばならないことがある。人間関係のみが依頼の表現を決定するのではない。上に挙げた人間関係でも，「おどし」「指導」「叱咤」など，H を下に見なすべき必然性がなければ「～しなさい」での依頼は行わないのが普通だろう。（“#”　はその状況では適切でない物言いであることを表す印である。）

(21) a．［コーチが選手に］そこのペットボトルを
　　{＃持ってこい／持ってきてくれ}。
　　b．［親が子どもに］お茶を{＃いれなさい／いれてちょうだい}。

つまり，失礼にならないように人に何かを頼むとき，「～して下さい」よりも丁寧でない依頼表現は存在しないのである。他の状況を考えてみても，レストランで（22a）のように頼む客とか，道を聞かれて（22b）のように教える人はまずいないだろう。

(22) a．＃メニューを見せろ。
　　b．＃この道をまっすぐ行って，次の角を左に曲がりなさい。

「～して下さい」は相手に対して積極的に敬意や礼儀正しさを表すというより，相手をないがしろにしていない，という程度の丁寧さしかないと言う方が正確だろう。このことを次のように言い表すことにしよう。

(23)「～して下さい」は無標の依頼表現である。

「無標」（unmarked）とは，情報が最も少ないという意味である。文の形式をみると，動詞に「丁寧の助動詞」を“加えた”のが「～して下さい」であるが，丁寧さという点から見ると，依頼に「見下しの意図」を“加えた”のが「～しなさい」である，ということになる。依頼の表現は従って，無標の「～して下さい」を中心に，より丁寧でない表現「～しなさい」と，より丁寧であるさまざまな表現に分けることができる。

(24)

	丁寧度
a．～しなさい	－（「見下しの意図」を追加）
b．～して下さい	Ø（無標）
c．（より丁寧な表現）	＋（「丁寧の意図」を追加）

４．２「～して下さい」 vs. より丁寧な表現

相手を見下す意図がない限り，「～して下さい」が丁寧度の最も低い，無標

の表現であることが分かった。今度は，「～して下さい」とより丁寧な表現との使い分けを見ていこう。依頼の状況をいろいろ考えてみると，①「～して下さい」のみが適切であり，より丁寧な表現が不適切である場合，②いずれも適切である場合，③「～して下さい」が不適切であり，より丁寧な表現が適切である場合，があることに気づくだろう。それぞれの例を以下に挙げる[3]。（より丁寧な依頼表現はいろいろあるが，以下の例では「～してもらえませんか」で代表させる。）

(25) ○「～して下さい」：×より丁寧な表現

a．［道を尋ねられて］次の角を左に曲がっ{て下さい／＃てもらえませんか}。
b．［薬剤師が患者に］食後に2錠飲ん{で下さい／＃でもらえませんか}。
c．［教員が学生に］教科書9ページを開い{て下さい／＃てもらえませんか}。
d．［車掌が乗客に］閉まるドアに気をつけ{て下さい／＃てもらえませんか}。
e．［店員が客に］ご用の際はお声をかけ{て下さい／＃てもらえませんか}。
f．［友人同士で］今度うちに遊びに来{て下さい／＃てもらえませんか}。[4]
g．［溺れている人が］助け{て下さい／ ＃てもらえませんか}！
h．［小さな子どもが親におねだりして］
　ディズニーランドに連れて行っ{て下さい／＃てもらえませんか}！

(26) ○「～して下さい」：○より丁寧な表現

a．［客が店員に］メニューを見せ{て下さい／てもらえませんか}。
b．［店員が客に］お名前をこちらに書い{て下さい／てもらえませんか}。
c．［教員が学生に］そこのペンを取っ{て下さい／てもらえませんか}。
d．［学生が教員に］先生，もう一度説明し{て下さい／てもらえませんか}。
e．［車で帰る友人に］ついでに駅まで乗せ{て下さい／てもらえませんか}。

---

3 他の立ち居振る舞いと同様，ことばの使い方が適切かどうかの判断には個人差が存在する。(25)-(27) の例文の判断は決して“正解”ではなく，大体の判断の傾向を示したものである。学習者にデータ収集をさせるときには，微妙な判断を要するデータではなく，判断にあまり個人差が見られないものを集めるように指導する必要があるだろう。

4 実際には，対等の友人（つまりウチの相手）ならば「来て」と言う方が普通だろう。2.2節で述べたとおり，ここでの「～して下さい」は「～して下さい」か「～して（くれ・ちょうだい）」のいずれかを意味する。以下の例文についても同様である。

(27) ×「～して下さい」： ○より丁寧な表現

a．［客が店員に］タバコを買って来｛＃て下さい／てもらえませんか｝。

b．［店員が客に］席をもう一つつめて座っ｛＃て下さい／てもらえませんか｝。

c．［ゼミの時間になっても学生Y が現れないので，教員が別の学生Xに］
Xさん，Yさんにメールし｛＃て下さい／てもらえませんか｝。

d．［学生が，教員が個人的に所有する本を見せてもらおうと］
先生，今度持って来｛＃て下さい／てもらえませんか｝。

e．［あまり親しくない友人が車で帰ろうとするときに］
ついでに駅まで乗せ｛＃て下さい／てもらえませんか｝。

f．［友人同士で］△△さん，明日車を貸し｛＃て下さい／てもらえませんか｝。

一見して分かるように，使い分けは人間関係によって一様に決まらない。人間関係が同じでも，頼む内容次第で「～して下さい」は適切にも不適切にもなる（例えば（26a）vs.（27a））。逆に，同じことを頼むにしても，人間関係次第で「～して下さい」は適切にも不適切にもなる（例えば（26e）vs.（27e））。

学習者がこういったデータを集めて（25)-(27）の3タイプに分類できたならば，（18B）のステップに進んで，「～して下さい」の使用を義務的にする要因，適切にする要因は何かを考えることにしよう。

４．３「～して下さい」の使用に関わる要因

目標はあくまでも無意識のうちに使いこなしている「～して下さい」の使用ルールを学習者が“発見”することであるので，教員はあくまでもその発見を促すように指導するべきである[5]。学習者が“発見”するのはおおむね次のようなものになると思われる。

(28)「～して下さい」しか使えないのは次の場合である。

A．依頼内容がＳの利益にならない。　　［教示，勧め］

---

5 とかく「文法」というと，用語や分類を丸暗記すること，という認識が学習者にある。この根強い認識ゆえか，文法（言語学）の授業では自分で考える手間を無駄と思い，教員が「答え」を提示するのを待つだけの学習者も少なくないように思われる。学習者が「文法」に対する強い思い込みを持っていることを念頭にいれ，教員は学習の目標が何かを一度ならず学習者に確認することが重要であろう。

B．依頼を断られることがSの生死にかかわる。[哀願]

(25a, b) において，SはHに尋ねられたこと（あるいは尋ねられそうなこと）を教えている。(25c, d) においてもSはルールとしてHが行うべき行為を教えている。また，(25e, f) ではHの利益になることをHが遠慮せずに行うよう勧めている。依頼内容がSの利益ではなくHの利益を指向している時には「～して下さい」しか使えないといえる ((28A))。

(25g, h) は上と異なり，「Sを助ける」「Sをディズニーランドに連れて行く」行為はSの利益を指向している。この点で，この依頼はむしろ (26), (27) に近いが，違う点が1つある。それは，「Sが切羽詰っている」ということである。溺れているSは，Hが助けないと死ぬかもしれない。また，子どもはおねだりを聞いてもらえなければ世も末と泣きわめく。小さな願いであっても人によっては生死にかかわる（ような気がする）こともある。そういう場合も，「～して下さい」しか使うことができない ((28B))。

次に，(28A, B) の条件が当てはまらない (26), (27) を考えよう。「～して下さい」とより丁寧な表現のいずれもが容認される (26) と，後者のみが適切となる (27) とでは，何が違うのだろうか。これに関しても学習者が“発見”をするように教員が促すことが重要である。その結果，次のようなルールが発見できると思われる。

(29) Hに「借り」ができない依頼ならば「～して下さい」を使うことができる。

Sの利益になることをHが負担すれば，SはHに「借り」ができる。貸し借りのバランスが崩れるとS, Hの人間関係にしこりが生じかねない。その借りを何らかの形で相殺できる見込みがあればSは無標の依頼表現「～して下さい」を使うことができる。具体的には次のような場合である[6]。

(30) A．通常業務の依頼：SはHの負担に対価を払うので，貸し借りゼロである。
B．小さな借り：Hの負担が非常に小さいため，借りができるほどではない。
C．長期的な貸し借りができる人間関係：Hへの借りは付き合いのなかでいずれ返せる。

6 Cf. Brown and Levinson (1987), 関根 (2007)。

（26a, b, d）は業務上の依頼である（(30A)）。また，（26c）で H に求められている動作は「ペンを渡すこと」であり，負担は非常に小さい（(30B)）。それに比べると（26e）の「車に乗せること」は H の負担（責任）が重いといえるが，「ついで」の依頼であるので，人間関係次第ではその程度の借りはいずれ返せると考えることができる（(30C)）。

（27）の依頼状況は，これらの条件のどれも満たしていない。（27a-d）は業務の中で行われる依頼ではあるが，通常業務外の，余計な仕事を H に求めている[7]。（27e）の依頼内容は（26e）と同じだが，ギブアンドテイクの関係がない人が相手だと，その借りを返済できる見込みが立たない。親しい友人であっても，（27f）のように相手に求める負担が大きい場合はやはりその借りを返済する見込みが立たないと言える。借りを一方的に作ることを頼む時には，我々は「～して下さい」では不十分だと感じ，より丁寧な表現を用いていることが分かる。

４．４「丁寧さ」「失礼さ」とは何か

「～して下さい」をどういう状況で使うことが「適切」であるかは分かった。今度は，「～して下さい」を「不適切」に使った場合，どうして「失礼」なニュアンスがでてくるのかを考えよう。それにより，「丁寧さ」の全体像が明らかになるはずである。

3.1節で見たとおり，依頼の表現は多様であるが，それらの表現は「依頼の間接度」すなわち「丁寧度」という段階に分けることができる。

（24）［再掲］	丁寧度
a．～しなさい	－（「見下しの意図」を追加）
b．～して下さい	Ø（無標）
c．（より丁寧な表現）	＋（「丁寧の意図」を追加）

我々は状況を判断して，その依頼をするのに適切な丁寧度をもった表現を選び取る。丁寧度は他の表現との対比によって決まるから，ある表現を選べば，その文字どおりの意味だけでなく，「選ばれなかった他の表現形との差異」（滝浦

7 通常業務であるか否かによって H への「借り」の認識が異なることは，英語をデータにした研究の中でで鶴田他 (1988) らがすでに指摘している。

(2008: 51)) も「含み」として表される。

例えば，4.1節ですでに見たとおり，「～しなさい」を使うと，「無標の「～して下さい」を使えばよいのに，Sはあえて丁寧度のより低い表現を選んだ」と判断され，その表現を聞いた人はSがHを「見下している」と感じるわけである。

この「含み」の考えを使ってステップ（18C）に進み，(25) や (27) での不適切な依頼表現がどう説明されるのか考えていこう。もちろん，この段階でも学習者が仮説を立て，その妥当性を検証し仮説を適宜修正していくように導くのが教員の役割である。彼らの説明が一つのところに落ち着くとは考えにくいので，最終的に教員が「説明の例」を提示するのもよいだろう。以下にその「例」を示す。

まず，(27) の依頼の状況で「～して下さい」を用いるとなぜ失礼な感じがするのか考える。前節で説明したとおり，「～して下さい」はSとHの貸し借り関係が結局は均衡するような依頼をするのに適切なレベルの丁寧度である。逆に言うと，Sが「～して下さい」を使えば，「これはHに借りを作るような依頼ではない」というSの認識を伝えてしまうことにもなる。また，より丁寧な依頼表現には，遠回しに依頼の意図を伝えることで「Hが依頼を断りやすいように配慮する」という思いやりもある。「～して下さい」にはその配慮が欠けているため，より丁寧な依頼表現との対比から，「一方的」「ぶしつけ」な感じがする。よって，Hに借りを作る依頼をするときにあえて「～して下さい」を用いると，Sは借りを借りとも思っておらず，ぶしつけである，と感じられるのである。

「一方的にHに借りを作る」という点では（25g, h）もそうである。どうしてこの場合は逆に，「～して下さい」の方が適切だと感じられるのだろうか？それは，より丁寧な依頼には，「Hが断りやすいように配慮する」という思いやりがあるからである。生死に関わる依頼にそのような「思いやり」があってはならない。従ってSは，あえてぶしつけな依頼を行うのである。この場合の「ぶしつけ」は「必死さ」だと理解してもらえるので，聞く人に違和感を与えない。

次に，(25a-f) の依頼の状況で，「～して下さい」ではなくあえてより丁寧な表現を用いた場合，どうして失礼になるのかを考えよう。より丁寧な表現には「Hにとって一方的な負担となることを頼んでいる」というSの認識が示

される。しかし，それは（25a-f）の依頼の状況に明らかに合わない。例えば，H（患者）が食後に薬を２錠飲むことは，S（薬剤師）の利益のために負担してやることではない。それなのに（25b）のSが より丁寧な表現を用いてHの負担に配慮を示すと，Sの発言を聞いた人はいぶかしさを感じ，Sが何を「Hの負担」だと思っているのかを推測することになる。

ありうるのは，「Hは愚かで，常識的・合理的な振る舞いが何かを判断するのも一苦労である，従ってSはその負担を思いやっている」という推測であろう。こうして，不必要に丁寧な表現はかえって H に対する侮辱を表すことになるのである。

最後に，（26）の状況を考えよう。この依頼は「貸し借りゼロ」と見なせるので，無標の「～して下さい」を使うことができる。そこであえてより丁寧な表現を用いれば，やはりそれを選んだSの意図が推測されることになる。（25a-f）の状況と異なるのは，この依頼は「貸し借りゼロ」とも「Hに負担を求めている」とも取れることであろう。例えば，業務とはいえ自分の都合で相手を働かせている，とSが感じれば（26a）の依頼内容はHに「借り」を作ることである，と認識することもあろう。つまり，（26）の状況では，Hの負担の見積りに幅を持たせられる。こういった状況での依頼表現の丁寧度は文字どおりSのHに対する丁寧度を表すことになるのである。

４．５　まとめ

本節の議論をまとめると，依頼表現には「丁寧度」の段階があり，それぞれの表現の「丁寧度」は次のように，他の表現との差異によって表される。

(31)

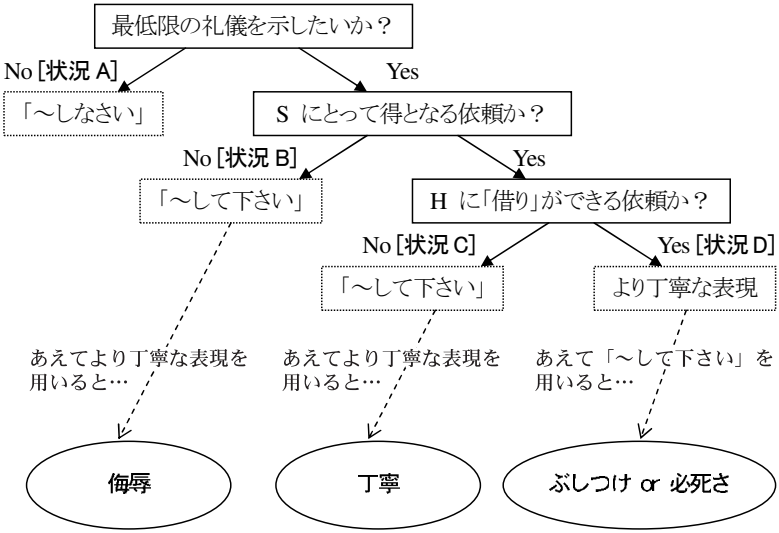
	Hへの配慮		
	最低限の礼儀	「借り」の認識	断りやすさ
a．～しなさい	×	×	×
b．～して下さい	○	×	×
c．（より丁寧な表現）	○	○	○

とくに失礼でも丁寧でもない無標の表現は「～して下さい」である。Sが貸し借りゼロと判断する依頼ならば無標の「～して下さい」を用いる。それ以外の表現を使うとあえてそれを選んだSの意図が「含み」として追加される。「～

しなさい」ならば「見下し」，より丁寧な表現ならば「侮辱」の含みが生じる。一方，H に借りを作る依頼ならば，より丁寧な表現を用いて「借り」の認識や断りやすさへの配慮を表す。その配慮を欠く「～して下さい」を用いると，やはりそれをあえて選んだ S の「ぶしつけさ」「必死さ」が「含み」として追加される。

以上のことを，より分かりやすく図示しておく。

(32)



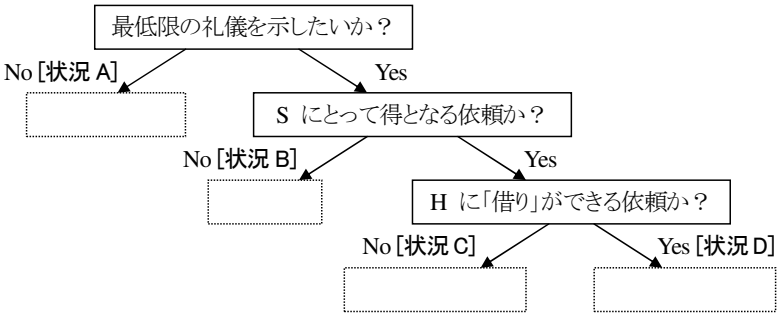
我々は無意識のうちに，このような母語知識を持っている。この“発見”をふまえ，今度は英語の依頼表現を考えていくことにしよう。

5．英語の依頼表現

以上の“発見”をふまえて最後のステップ（18D）に進むことにしよう。ここでは，適切な丁寧表現を決定する日本語のルールを使って英語の丁寧表現の使い分けをどこまで説明できるか考える。説明できない「ズレ」があぶり出されれば，我々はそれのみを英語の特徴として学べばよい。具体的には，上の(32）のテンプレートを使って，どういう状況でどういう依頼表現を用いるこ

とが適切か，空欄を埋める形で考えていくことにしよう。

(33)



調査方法としては，さしあたり次の2つが考えられる。一つは，上の A～D に相当する具体的な状況を学習者が考え，その状況で依頼するとしたらどう言うか，ネイティブ英語話者に尋ねてみる。あるいは，身近な英語素材（映画，テキスト）を見て，A～D の状況でどのような依頼表現が使われているか調べてみることもできる。以下，学習者が発見すると思われることを見ていこう。

５．１　状況 A，B での依頼： 無標の依頼は「命令文」

まず状況 A, B について考える。日本語の命令文には失礼さが感じられたが，英語の命令文にそのような失礼さはなく，次の例のように状況 B でも用いることができる。(34) の文はいずれも H の利益を指向したアドバイス，祈念，教示である。

(34)　a．[新商品情報を知りたがっている友人に]
　　Go on line for SgoiPen.（ネットで SgoiPen で検索するといい。）
　　b．[観光に訪れたという通行人に]
　　Well, enjoy yourself.（じゃあ，楽しんできてください。）
　　c．[友人にカード払いの手順を教えて]
　　Insert your card there.（そこにカードを入れて）
　　（『NHK』５月号 より）

この状況で *please* を使ことはできないと第１節で述べた。該当例（2a）を以下に再掲するとともに，類例（35）を追加する。（不適切な例は「収集」できないので，教員が提示する。また，この状況での *please* 使用の可否をネイティブ英語話者に尋ねさせるのは学習者に余計な混乱をもたらすかもしれない。筆者が調べた限りでは，状況 B での *please* の使用の容認度には個人差あるいは地域差が存在するようである。社会言語学的には興味深い点であるが，ネイティブの出身地・年齢・データが現れる文脈をかなり厳密にコントロールしないと首尾一貫したデータは得られそうにない。）

(2a)［目の前にあるエレベーターで，用務先にまで行けるかと尋ねる同僚に］
Yes. ＃*Please* get off on the ground floor.（はい。１階で降りて下さい。）

(35) a．［薬剤師が患者に薬を処方して］
＃*Please* take two pills after each meal.（食後に２錠飲んで下さい。）
b．［Hにある場所への行き方を教えようとして・・・］
＃*Please* take the western exit and turn light.
（西口を出て左に行って下さい。）
（(a) from H&K, p.56; (b) from White (1993: 196)）

例文（34）から分かるとおり，命令文自体に失礼さはない。では，あえて失礼に依頼したければどうすればよいのだろうか。データ収集より，「失礼」の意図は「罵倒表現」に担わせることが発見できるだろう。

(36) a．Hurry up, *donkey*.（急げ，ノロマ。）
b．*Go fly a kite*!（あっちで凧でもあげてろ＝失せろ。）

こう考えると，特に失礼でも丁寧でもない無標の依頼表現は，日本語では「～して下さい」，英語では命令文，ということになる。命令文＋ *please* はそれよりも丁寧度の高い，有標の表現である。

(37)

	丁寧度	日本語	英語
a．	－	～しなさい	命令文＋罵倒表現
b．	Ø（無標）	～して下さい	命令文
c．	＋	（より丁寧な表現）	命令文＋ *please*, （その他のより丁寧な表現）

「命令文」が無標だと分かれば，どうして（34），（35）の状況で *please* を付けることが適切でないのか，日本語の場合と同じとおりに説明できる。第４節の説明では，状況 B では無標の依頼表現（「～して下さい」）しか使えない。それ以上に丁寧な表現を用いると，「H は常識的振る舞いにさえ負担を感じるから，S はその負担を思いやっている」との侮辱の含みが生じる。英語の場合も同様である。状況 B では無標の命令文を使う。それよりも丁寧な「命令文＋ *please*」を用いると，同じく侮辱の含みが生じてしまうのである。第１節で，（2a）は H の知性を疑っているような感じがすると述べたが，それは *please* が「H への不必要な思いやり」を表しているためである。

ただし，我々はまだ状況 B の該当例をまだ見尽くしていない。例文（9），（10）を再び検討してみよう。

（９）a．*Please* send my best wishes to Sally.
（サリーによろしく伝えて下さい。）
b．*Please* accept my deepest sympathy on the death of your father.
（お父様が亡くなったことについて，心からお悔やみ申し上げます。）

（10）a．*Please* have a nice trip.（旅行を楽しんできて下さい。）
b．［家族を亡くした人に］
If there is anything we can do to help, *please* let us know.
（何か力になれることがあれば，言って下さい。）

これらは H の利益を指向した依頼だから状況 B に当てはまる。これらは命令文でも問題ないのだが，*please* を付けても「侮辱」の意図を含まない。逆に，「H への思いやり」を表すことになる。

まとめると，状況 B での依頼には命令文を用いる。そこに *please* を付けると H に対する「侮辱」または「思いやり」の気持ちがあると解釈される。ど

うして相反する含みが生じるのかは5.4節で考える。

5．2　状況Cでの依頼：命令文～より丁寧な表現

次に，状況Cでの依頼にはどのような表現が使われるか考える。Sの得になるが，かといってHに借りができるほどでもない依頼，とは，（30A-C）で挙げたような，通常業務の依頼，小さな依頼，その借りを返せると見込めるだけの人間関係がある場合の依頼のことである。英語データを収集していくと，日本語の場合と同様，さまざまな丁寧度の表現が可能であることが分かる。

（38）a．［客が店員に，コーヒーを注文して］
Give me a coffee.／Give me a coffee, *please*.／
I'*d like to* have a coffee.
b．［店員が客に，書類に記入をしてもらおうと］
Fill in this form.／*Please* fill in this form.／
Could you fill in this form, *please?*
c．［友人同士で，食卓塩を取ってもらいたいときに］
Pass me the salt.／Pass me the salt, *please*.／
Can you pass me the salt?
d．［家族同士で，何かを片付けてもらいたいときに］
Put them away.／*Please* put them away.／
Will you put them away?

この場合の借りは差し引きゼロと見積もることもできるが，大きく見積もることもできる。従って，Sの見積もりを反映して様々な丁寧度で依頼することができる。丁寧度が高いほど，Sの「借り」の認識が強く，文字どおりより丁寧な依頼となる。第1節の例文（8）［以下に再掲］は，（38d）と同様，家族内の助け合いとして求められる小さな依頼ならば命令文でもよい。しかしあえて*please*を付けることでH の負担を大きく見積もり，負担をねぎらう気持ちを示しているのである。

（8）*Please* wash the dishes.（お皿を洗って下さい。）

５．３　状況Ｄでの依頼：より丁寧な依頼表現

最後に，状況Ｄではどのような依頼表現が用いられるかを考えることにしよう。Ｈに一方的に借りを作る状況ではどのような依頼表現が用いられているか，学習者に収集させてみよう。『NHK』から筆者が収集した例を（39）に挙げる。

（39）ａ．［社員が役員に，話を聞くために時間を取ってもらおうと］（12月号）
I'd like to have a little talk with you about pay raises for the upcoming year.
（来年度の昇給について，少しお話をしたいのですが。）
ｂ．［友人に，自分の目指す場所まで案内してもらおうと］（９月号）
Do you mind showing me the way?
（そこまで案内してくれませんか。）
ｃ．［生徒が教員に，進学相談をしようと］（９月号）
Could you give me some advice about colleges I could apply to?
（私が受けられそうな大学についてアドバイスを頂けませんか？）
ｄ．［同僚に自分の仕事を手伝ってもらおうと］（８月号）
Could you possibly run off a copy of this for me?
I'm in a bit of a rush.
（このコピーを一部取ってもらえないでしょうか。
ちょっと急いでいて。）

Ｈへの一方的な借りが明らかである場合，命令文や命令文＋*please* のような直接的依頼表現が用いられることはない。（39a-d）（に相当する，学習者が収集した例）を（40a-d）のように命令文＋*please* でパラフレーズできるかネイティブ英語話者に尋ねてみよう。いずれもぶしつけな感じがするとの回答を得るだろう。

（40）ａ．＃*Please* have a little talk with me about pay raises for the upcoming year.
ｂ．＃*Please* show me the way.
ｃ．＃*Please* give me some advice about colleges I could apply to.
ｄ．＃*Please* run off a copy of this.

例文（2b）［以下に再掲］もこの状況に該当すると思われる。

（2b）［講演会の司会が，講演者 X の紹介をした後で X に・・・］
＃Professor X, *please* begin your talk.（それではX教授，お願いします。）

S は X に，S を含む聴衆の利益になることを頼んでいる。この状況ではより丁寧に頼むことが適切である。White（1993: 199）が挙げている適切なパラフレーズから一例を挙げる。より間接的な依頼表現を用いることが適切であることが分かる。

（41）And now, Professor X, *would you like to* begin?

以上，H に一方的に借りを作る場合に「命令形＋ *please*」形で依頼することは不適切であり，より丁寧な依頼表現が求められることが分かった。ただし，ここで注意すべきことが 2 つある。まず，この状況の依頼でも，「S が切羽詰まっている」場合ならば，命令文または命令文＋ *please* で依頼することが可能である。むしろ，より丁寧な表現を用いると「必死さ」が消えてしまい，不適切である。該当例を以下に挙げる。

（42）a．［溺れている人が］Help!／Help, *please*!／＃*Could you possibly* help?
b．［子どもが母親について行こうとせがんで］
Let me go with you, mummy?／
Please let me go with you, mummy?／＃*Could*
you possibly let me go with you, mummy?（H&K, p.55 を改変）

第 2 の注意点であるが，例（5）をもう一度見てみよう。

（5）＃Could you open the door, *please*?（ドアを開けてもらえませんか？）

手がふさがっている S がたまたま目の前にいた H に頼むのなら，H に余計な負担を強いることになるので，状況 D に該当する。S は *Could you* ... という

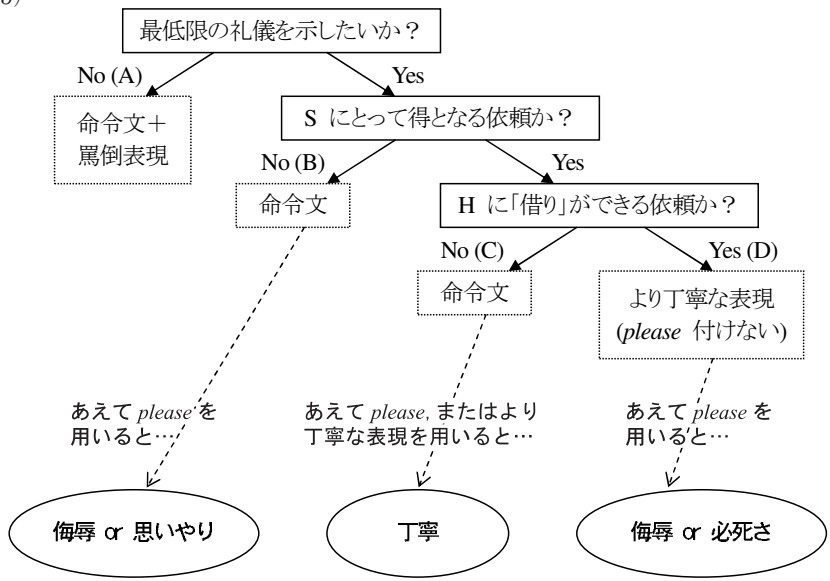
丁寧な依頼表現を用いているが，H&K によるとこの依頼は「侮辱的」である。それは，*please* を付けたせいであるという。つまり，丁寧な依頼に *please* を付けると「丁寧さ」が増大するどころか，「丁寧さ」の効果が取り消されてしまうのである。

以上の注意をふまえてより正確にまとめると，状況 D で S が切羽詰まっていない場合は，①「より丁寧な表現を用いること」と，②「*please* を付けないこと」の両方が求められる。

５．４　*please* の語用論

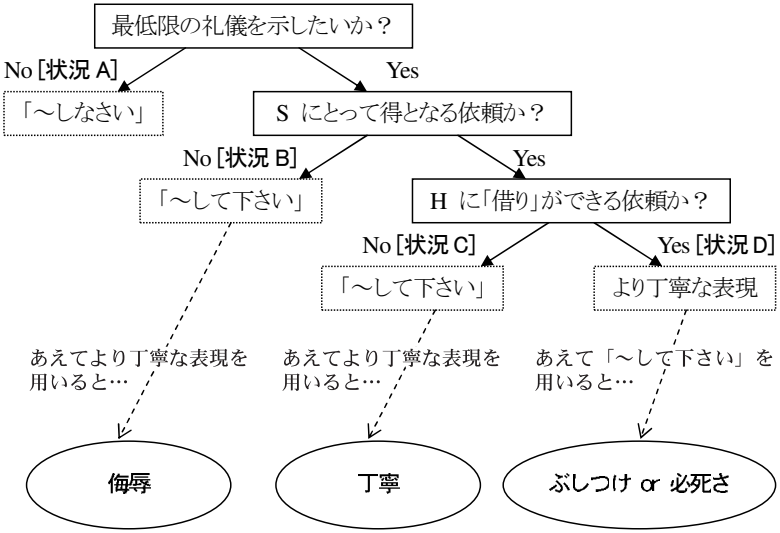
このようにデータを収集・整理していき，表（33）の空欄を埋めていこう。学習者は，英語の適切な丁寧表現が次のように決定されることを発見したことになる。

(33)’



日本語の丁寧表現を決定するルール（32）［以下に再掲］と比較してみよう。

(32)



いずれの言語においても，状況 B, C では無標の依頼表現（日「～して下さい」，英「命令文」）を使うことが適切である。状況 C ではさらに，より丁寧な表現を用いることもできる。より丁寧な表現を使うほど，S の H に対する「借り」の認識が強いことが示され，文字どおりより丁寧な表現であると解釈される。

日英語でのズレもいくつか見られる。まず状況D であるが，無標よりも丁寧な表現を用いるのは日英語に共通する。しかし，英語の場合はより丁寧な表現であっても，命令文＋ *please* や “Could you ..., *please*?” など，*please* がつくとせっかくの「丁寧さ」の効果が消えてしまいやはり「侮辱」の含みを持つ (cf.(5))。日本語ではこのような「丁寧さの取り消し」は観察されていない。

第 2 の相違点は，状況 B であえて無標よりも丁寧な表現を用いた場合の「含み」である。日本語の場合は，「侮辱」のニュアンスしか持たないが ((43))，英語で命令文＋ *please* を用いた場合は，「侮辱または思いやり」のニュアンスを持つ ((44), (45))。

(43)　a．（＝(25b)）［薬剤師が患者に］＃食後に１錠飲んでもらえませんか。
［含み： 相手の理解の遅さに対する苛立ち，侮辱］
b．（＝(25d)）［車掌が乗客に］＃閉まるドアに気をつけてもらえませんか。
［含み： 相手が公共ルールを守らないことに対する叱咤］

(44)　a．（＝(２a)）［このエレベーターで，用務先にまで行けるかと尋ねる同僚に・・・］
Yes. ＃*Please* get off on the ground floor.［含み： 苛立ち，侮辱］
b．（＝(35a)）［薬剤師が患者に薬を処方して］
＃*Please* take two pills after each meal.　［含み：苛立ち，侮辱］

(45)　a．（＝(９b)）*Please* accept my deepest sympathy on the death of your father.
［含み： 同情，思いやり］
b．（＝(10a)）*Please* have a nice trip.［含み： 祈念，思いやり］

いずれのズレにも *please* が関わっていることが分かる。このニュアンスは *please* が持つ語彙的性質から生じると考えられるので，最後に *please* の意味についてもう一度考える。学習者に *please* の意味を辞書で調べさせてみよう。すると，次のことが分かるだろう。

please の副詞用法は「喜ばせる」「喜ぶ・好む」という意味の動詞用法から派生したものである。その原義のニュアンスは副詞用法にも残っているという（H&K）。つまり，命令文に *please* が追加された場合，追加されるニュアンスは「私を喜ばせるために」「そうしてくれると私は嬉しい」といった，S の利益追求・喜びの気持ちである。

これが分かると，状況 D で *please* を付けるとどうしてぶしつけな感じがするのかより正確に説明できる。該当例（５）を以下に再掲する。

（５）＃*Could you* open the door, *please*?（ドアを開けてもらえませんか？）

状況 D では普通 *please* を使わない。そこで *please* を使うと，あえてそうした S の意図が探られる。その際のヒントになるのが *please* の原義である。S の利益・喜びを表す *please* がつくと，「S の個人的利益を根拠にして H に依頼している」こと，もっと言えば，「S は自分の利益のために H を働かせてもよいと思って

いる」ことが現れてしまう。「丁寧さ」とは，H の立場や都合を思いやることであった。*please* はこの思いやりを欠くので，他に丁寧度の高い表現が使われていても，*please* が付けば「S のエゴ」「ぶしつけさ」が透けて見え，丁寧さの効果が取り消されてしまうのである。

なお，この *please* のこの意味は状況 C にも当然存在する。しかし，S は「貸し借りゼロ」と見なして依頼しているのだから，依頼状況と *please* の意味は調和する。そのため *please* の意味が「違和感」として浮かび上がることはなく，ちょっとした感謝の気持ちを添える程度のニュアンスしか持たない。

状況 B における日英語のズレは次のように説明される。状況 B では命令文を使えばよい。あえて *please* を追加すると，そうした S の意図が勘繰られる。*please* には「そうしてくれると S は嬉しい（助かる）」という意味がある。しかし，状況 B の依頼は，S ではなく H の利益を指向しているので，*please* の意味と依頼内容が矛盾する。勢い，その矛盾には何かしらの「嫌味」があると解釈されることになる。しかし，「嫌味」以外の含みがあると解釈できる場合もある。それが（45）のような「共感・祈念」を表す場合である。S が *please* を付けたのは次のような判断に基づくのだろう。

（46）A．S は H の幸せを我がことのように気にかけている。
　　B．よって，H が喜ぶことは S の喜びでもある。
　　C．H を喜ばせようとして勧めることを，*please*（「S のために」）と依頼する。

（45）の文を聞いた人は逆のプロセスをたどって S が *please* を付けた理由を探る。その結果，（46A）の「H に対する大きな思いやり」を感じ取る。

これに相当する例をさらに挙げておこう。

（47）［パーティの主催者が客に］
　　a．Have some more cake, *please*.（ケーキをもっとどうぞ。）
　　b．Make yourself comfortable, *please*.（どうぞお楽に。）
　　c．Take a seat *please*.（席にお着き下さい。）
　　d．*Please* have a cigarette.（タバコをどうぞ。）
　　（(a), (b) from H&K, p. 57; (c) from クワーク&グリーンバウム（1977: 345); (d) from White（1993: 195））

(48) a．［講演者が聴衆に］*Please* interrupt me.（いつでも質問して下さい。）
　　b．［教員が初対面の院生に］*Please* call me John.
　　（ジョンと呼んで下さい。）
　　((a) from Wichmann (2004: 1533); (b) from Sato (2008: 1260))

いずれも H の利益を指向する依頼である。命令文でも問題ないが，あえて *please* を追加すると，「H が遠慮せずにそうしてくれたら S も嬉しいから」という思いやりが追加される。

(44a, b) の S は単に聞かれたこと（聞かれそうなこと）に答えているだけなので，(46) の解釈を適用することができない。よって，ここに含まれる *please* は「侮辱」の意図で付けられたという解釈になってしまう。(46) が適用できる「勧め」「祈念」の状況でのみ，*please* が S の思いやりを表すのである。

しかしながら，*please* を付けて何かを勧めたり祈念したりするのはリスクの高い行為だとも言える。S が (46) にあるような気持ちをもって *please* を使ったとしても，それを H が感じ取ることに失敗すれば，「*please* ＝侮辱」と捉えられてしまう。あるいは，(46A) のような思いやり自体が「こびへつらい」「白々しさ」を感じさせて H に不快感を与えるかもしれない。ゆえに，この状況での逸脱には実際にはかなり制限があり，すでに見たような「パーティで何かを勧める」「定番の挨拶をする」など，形式化していることが多いようである。次のような「思いやり」の例文を作ってネイティブ話者に提示してみたが，なぜかは分からないが不自然であるとの回答を得た。

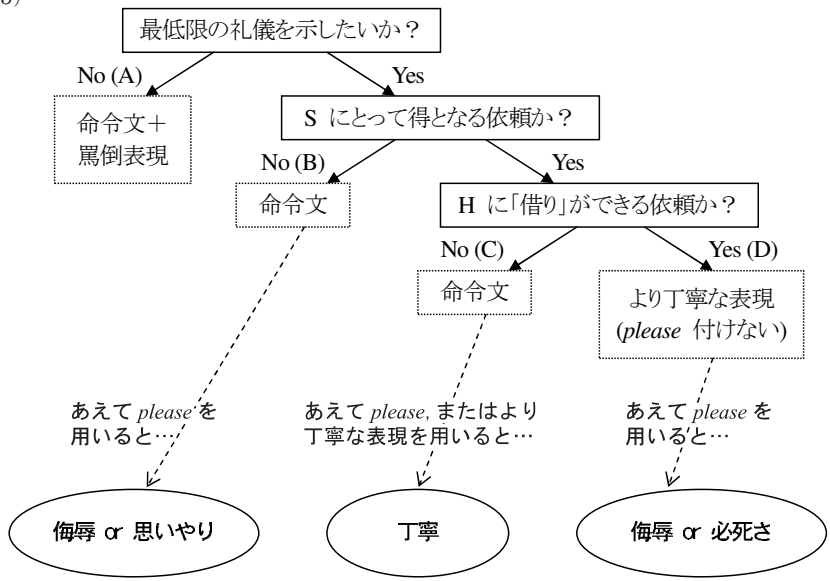
(49) ＃*Please* win the championship!（優勝して下さいね！）

思いやりの気持ちは命令文でも十分伝わるので，我々非ネイティブの英語話者が「相手を思いやる気持ち」を *please* で表すことには慎重になっておく方が無難であろう。

６．まとめ

(18A-D) に示した段階を踏みながら，我々は「丁寧さとは何か」を内省し，どういう状況でどういう依頼表現が適切であるかを発見することができた。

(33)'



適切な丁寧さを逸脱すると，あえて逸脱したSの意図が探られる。その「隠れた意図」がいかに同定されるかも，母語の内省から発見することができた。

我々の疑問の出発点は「*please* の使い方」であった。上の図が示すとおり，丁寧さは他の表現との差異から決まるので，*please* についてだけ学ぶことは十分でない。しかしあえて，発見したことの中から *please* の使用に関わる部分だけを抜き出せば，次のようにまとめることができるだろう。

Ⅰ．*please* は基本的に「貸し借りゼロ」の依頼に用いる。具体的には次の場合である。

A．通常業務の依頼：SはHの負担に対価を払うので，貸し借りゼロである。

B．小さな借り：Hの負担が非常に小さいため，借りができるほどではない。

C．長期的な貸し借りができる人間関係：Hへの借りは付き合いのなかでいずれ返せる。

Ⅱ．これ以外の状況で *please* を用いると，その原義から，「S の喜び・利益のために」依頼を行っているとの含みが前面に出てくる。自分の喜び・利益を根拠に H を働かせようとする態度は，依頼の状況次第で適切にも不適切にもなる。

Ⅲ．H に一方的に借りを作る状況で *please* を用いると，S は自分の利益のために H を働かせてよいと判断していることがあからさまとなり，ぶしつけさが生じる。ただし依頼が生死に関わるのなら，そのぶしつけさは「必死さ」の現れであると解釈され，聞く人に違和感を持たせることはない。

Ⅳ．H に利益をもたらす「教示」の状況では，「S の喜び・利益のために」という *please* の意味と，依頼内容が矛盾する。結果として，*please* は「愚かな H に対する S の嫌味・苛立ち」を表すと解釈されることになる。ただし，「勧め」「祈念」の状況では，「H の喜びは S の喜びであるから」*please* を付けた，という解釈が可能であるので，*please* は H への共感・思いやりを表すことになる。ただし，この意図での使用はかなり形式化している。

以上明らかになったように，「*please* ＝～して下さい」とか，「*please* は丁寧な依頼の表現である」とかいった単純な対応は成り立たず，*please* は状況次第で丁寧にも失礼にもなる。*please* を適切に使えるようになるにはⅠ～Ⅳを知る必要があるのだが，いきなりこれらを学習者に提示しても単なる「暗記項目」になってしまう。丸暗記の負担もあるし，なぜそうなのか分からないから学ぶ楽しさもないだろう。しかし，日本語話者としての直感を利用すれば，英語表現の微妙なニュアンスや使用の制約について，納得できる方法で学習し，理解することができる。

参考文献

『E-Gate』＝『E-ゲイト 英和辞典［携帯版］』. 東京：ベネッセ, 2003.
『広辞苑』＝『広辞苑（第５版）』. 東京：岩波書店, 1998.
『ジーニアス英和大辞典』. 東京：大修館, 2001.
『日本語大辞典』. 東京：講談社, 1989.
『ユース』＝『ユース・プログレッシブ英和辞典』, 東京：小学館, 2004.
『ロングマン』＝『ロングマン英和辞典』. 東京：ピアソン・エデュケーション, 2006.
CEDAL＝*Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners*（3rd ed.）. Glasgow: HarperCollins Publishers, 2001.

OALD＝ *Oxford Advanced Learner's Dictionary*（6th ed.）. Oxford: Oxford University Press, 2000.

有田由紀子（2007）「*please* の解釈とアクセントの関係」.『福岡女学院大学紀要　人間関係学部編』 8, 1-10.
井出祥子（2006）『わきまえの言語学』. 東京：大修館書店.
江川泰一郎（1991）『英文法解説（改訂３版）』. 東京：金子書房.
クワーク，R.・S. グリーンバウム（著），池上嘉彦（訳）（1977）『現代英語文法 大学編』. 東京：紀伊國屋書店.
小林亜希子（2008）「国文法を利用した英文法教育の試み」.『島大言語文化』25, 41-75.
関根和枝（2007）「「～てください」の機能について－「～てください」は依頼か－」.『昭和女子大学大学院教育・コミュニケーション研究』2, 81-95.
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』. 東京：研究社.
鶴田康子・P.ロシター・T.クルトン（1988）『英語のソーシャルスキル』. 東京：大修館書店.
Brown, P. and S. Levinson（1987）*Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
Carter, R. and M. McCarthy（2006）*Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
Fukushima, S.（2000）*Requests and Culture: Politeness in British English and Japanese*. Bern: Peter Lang.
Hofmann, Th. R. and T. Kageyama（1986）*10 Voyages in the Realms of Meaning*（10日間意味旅行）. 東京：くろしお出版.
Leech, G. and J. Svartvik（2002）*A Communicative Grammar of English*（3rd ed.）. London: Longman.
Sato, S.（2008）"Use of 'Please' in American and New Zealand English," *Journal of Pragmatics* 40, 1249-1278.
White, R.（1993）"Saying Please: Pragmalinguistic Failure in English Interaction," *ELT Journal* 47, 193-202.
Wichmann, A.（2004）"The Intonation of Please-Requests: A Corpus-Based Study," *Journal of Pragmatics* 36, 1521-1549.